近代漢語　「開化」「半開」「未開」小考

伊　藤　真梨子

［キーワード：①開化　②未開　③近代漢語　④翻訳語　⑤基本語化］

1. はじめに

「文明開化」の時代「開化」という語は「開化饅頭」のように様々なものにも使われる流行語であったが、現在では「開化」という語を「文明開化」の時代を語る以外で目にすることは少ないように思われる。社会の発達の度合いを表す「開化」「半開」「未開」、この３語のうち、明治時代の流行語として扱われているのは前の２語であり「未開」についてはそのような扱いを受けてはいない。しかし、現在では「開化」「半開」よりも「未開」の方が目にする機会のある語ではないだろうか。もちろん、このことには、ことばそのものの問題以外に、文化間の優劣といった考え方自体が時代錯誤のものとなっていったということが関係しているだろう。

本稿では「社会の発展の程度を表す」語であるこの３語について、これまであまり研究のなされていない「半開」と「未開」とを中心にして、語義の変遷を整理するとともに、明治・大正期における使用状況を確認し考察を加えたい。

2.「開化」「半開」「未開」の先行研究

「開化」「半開」「未開」の３語のうち、「開化」については先行研究があるようだが、「半開」及び「未開」について取り上げて述べたものは今のところ見つけることができていない。その点で、「開化」「半開」「未開」の３語を取り上げて比較検討することは意義のあることだと思われる。

なお、「開化」についての先行研究には進藤咲子（1970.03）「開化期の言語の様相」がある。紙幅の都合により残念ながら本文を引用できないが、その中で「開化」「半開」「未開」について述べられていることは以下の４点である。

①久米邦武氏や木村毅氏等によって「文明開化」がエンライテント・シヴィライゼーション（enlightenment civilization）の訳であることが指摘されていること。

②幕末・明治初期には、「文明開化」「文明」「開化」「開明」という語が非常に多く、明

治11年の郵便報知新聞におけるこれらの使われ方をサンプル調査によって見ると、「開明」18「文明」11「開化」若干、ほかに熟語として、開明社会、開明風潮、文明器物、文明進度などが用いられていた。また、これと年代の近い、「東巡録」（県官の奉答文、上奏文、随行員の見聞録等が多数収録されている）を資料にして、明治9年頃の、「文明開化」などの一連の語の使われ方を見ると、「開明」が多く使われている。つまり明治10年頃には、「文明開化」にかわって、「開明」が好んで用いられたと思われ、「開化」もあまり用いられていないということ。

③桑木厳翼の「大戦と文化」（大正6年6月）によると、文化＝文明＝開化という関係が成り立つが、明治初期の使われ方はこの意識とは違っているように思われるということ。

④『輿地誌略（山梨県重版）』による開化の等級は以下のように四つに分けられていて、「甲　蛮夷　　乙　未開ノ民（セミバルベリヤン）　　丙　半開ノ民　　丁　文明開化ノ民」となっているということ。

このように、明治10年前後の「開化」という語についてはある程度わかっているのであるが、それ以降の使われ方や、「開化」と関係する「半開」「未開」についてはまだ明らかになっていないことが多い。したがって、今後調査研究していくものとして

（1）明治・大正期の「開化」「半開」「未開」の使用状況。

（2）明治・大正期の「開化」と「開明」の比較。

（3）明治・大正期において、社会の発展を表す語（※以下『社会の発展』＝『社会がひらける』とする。）を「開化」―「半開」―「未開」の3段階としていたのか、それとも「開化」―「半開」―「未開」―「蛮夷」の4段階としていたのかということ。

が考えられる。本稿ではまずこのうちの（1）について、「開化」「半開」「未開」の明治・大正期の使用状況の通時的変化を概観することとする。

3.「開化」「半開」「未開」の各辞典における記述（※地名等の用例は省略している。）

「開化」「半開」「未開」の語義が現在のところどのように理解されているのかを確認するため、『日本国語大辞典　第2版』（以下『日国②』とする）、『小学館古語大辞典』、『角川古語大辞典』、『古典基礎語辞典』、『明治のことば辞典』（以下『明治』とする）、『現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典』（以下『漢語』とする）、『大漢和辞典』（以下『大漢和』とする）で調べ、以下の情報を得た。ただし、調査対象語が立項されていない辞典もある。

3－1.「開化」

まず、「開化」「半開」「未開」の3語のうち、明治期に最もよく使われていたであろう、「開化」の辞典に記載されている意味を確認したい。「開化」は『日本国語大辞典②』『明治のことば辞典』『現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典』『大漢和辞典』には立項されているが、『小学館古語大辞典』『角川古語大辞典』、『古典基礎語辞典』には立項されていない。まず、『日国②』『明治』『漢語』での意味と用例は以下の通りである。（※以下、用例における下線は筆者による。）

『日国②』

①知識や文化が開け進むこと。「文明開化」と熟して用いられることが多く、明治時代の急激な西洋化現象に伴う流行語でもあった。

＊西洋事情（1866 - 70）〈福沢諭吉〉外・一「世の開化を進め法則を設け」

＊百学連環（1870 - 71頃）〈西周〉聞書・総論「当今西洋の歴史はCivilization即ち開化を目的とし、之に基きて書き記す」

＊安愚楽鍋（1871 - 72）〈仮名垣魯文〉初「追々我国も文明開化（カイクヮ）と号（いっ）てひらけてきやしたから」

＊自由之理（1872）〈中村正直訳〉三「蓋し今世開化上進したるとはいふなれど、その実は、人類一同に未だ十分完全なる境地に至ることは、なほ遙かに隔りたる末世の事なるべし」

＊和英語林集成（再版）（1872）「Kaikuwa　カイクヮ　開化（ヒラケテ　カワル）。Kaikuwa（カイクヮ）スル」

＊李邕 - 淄州刺史謝上表「子人開化、議事立権」（※この例は返り点を省略。）

②西洋風を気どったり新しがったりすること。ハイカラであること。新知識を身につけていること。また、そのさま。

＊西洋道中膝栗毛（1874 - 76）〈総生寛〉一二・下「開化（カイクヮ）な文句でちょいと芸者が今晩はあり難ふとおし出しても唄へる位へでなくっちゃア折角作って甲斐がねへぜ」

＊風流仏（1889）〈幸田露伴〉三・上「開化の若い方には珍らしく此兀爺（はげぢい）の話を冒頭（あたま）から潰さずに御聞なさるが快ければ」

＊破戒（1906）〈島崎藤村〉一八・五「勝野君なぞは開化した高尚な人間で、猪子先生の方は野蛮な下等な人種だと言ふのだね」

語誌　もと仏教語でカイケ（ケは呉音）と読み「教え導く」の意味であった。それが明治初期にカイカという読みで「世の中が開ける」の意味で使われ始め、急激な西洋化を象徴する語となった。単独でも、あるいは「開化文明」「文明開化」などと複合しても使われ、また、“civilization”の訳語として、この時期から用いら

れた。

『明治』

（前略）▽意味　明治時代の急激な西洋化現象を指す流行語。Civiliration（※辞典本文ママ）の訳語として用いられた。西周の『百学連環聞書』（明治3）総論には「当今西洋の歴史は　Civiliration（※辞典本文ママ）即ち開化を目的とし、之に基きて書き記す」とある。

『漢語』

①「polish.　開化」（堀達之助ら・文久二年（一八六二）『英和対訳袖珍辞書』）

②「大君と外国政府と取結たる条約に、ミカドの保証を為したる、……此一挙に由て、日本は世界万国の尊敬を受け、国民一般の開化文明に進むべし。」（『日本新聞』（別本）十七号　慶応元年（一八六五）十月十五日）

③「英国文字をヒマニッチと云ふ意は則ち Mental Civilization（※左ルビで「心ノ開化」）なる意にして」（西周・明治三年（一八七〇）『百学連環』総論）

④「当州ニ至ルマテ途上景況ハ、合衆国開化ノ歴史ヲ、順次ニ目撃シ来ルト謂フヘシ、」（久米邦武・『米欧回覧実記』九　市高俄ヨリ華盛頓府鉄路ノ記　明治五年（一八七二）　一月二十日）

⑤「あんまり品の悪くねへ方が、いゝぜ。そうして開化な文句でちよいと芸者が、今晩はあり難ふとおし出しても、唄へる位（くれ）へでなくッちやァ、」（仮名垣魯文・明治七年（一八七四）『西洋道中膝栗毛』十二・下）

意味・出自　①～④知識や文化がひらけ進む（こと）。⑤西洋風をきどること。ハイカラ。幕末、特に明治初期の急激な西洋化現象をさす流行語。英語 Civiliration（※辞典本文ママ）の訳語。単独でも、「文明開化」（明治八年（一八七五）『大全漢語字彙』）「開化文明」（明治二年（一八六九）『漢語字類』）「開化進歩」（明治元年（一八六八）～明治五年（一八七二）『布令字弁』）と複合した形でも用いられた。顧愷之『定命論』「夫建極開化、樹声胎則。」李邑・淄州刺史謝上表「十人開化、議事立権。」（※以上２例とも本文の返り点を省略。）とある漢籍の例は、共に、字義通りの、化を開く、即ち風化教導して世の中の進歩をはかるの意。これを基に、「世が開けて文化がすすむ」意で「開化」としたもの。福沢諭吉は慶応三年（一八六七）『西洋事情』（外・一）「世ノ文明開化」で、礼儀を重んじて情欲を制し、世のため尽すこと、自由と人間性の尊重、衣食住居の清潔、食料充足のための農牧畜業の振興、教育の普及、商工業の発展などが、真の文明開化であると説いている。

『日国②』では「開化」は「明治時代の急激な西洋化現象に伴う流行語」と記述され、その用例も他の２語に比べるとずっと多く挙げられている。そして、その意味については①の「社会がひらける」という社会全体の文化的な変化を表す意味から、②の「西洋風を気どる」という人を形容する表現に拡大していったことがわかる。『明治』でも『日国②』の①とほぼ同様に、「開化」を「明治時代の急激な西洋化現象を指す流行語」としているが、『日国②』の「西洋風を気どる」という意味についてはふれられていない。一方、『漢語』での記述を見てみると、「開化」の意味については『日国②』と大きくは変わらず、やはり「明治初期の急激な西洋化現象をさす流行語」ということにもふれられているが、語誌についての記述に違いがある。

『日国②』では「開化」の語誌として、もとは仏教語の「カイケ」で「教え導く」の意味であったものが、明治初期に「カイカ」という読み方で「世の中が開ける」の意味で使われ始めたとしているが、『漢語』では顧愷之『定命論』や李邑・淄州刺史謝上表という漢籍に見られる例から生まれたものとする説を挙げている。

そこで、中国での「開化」の意味を『大漢和』で確認したい。

『大漢和』
①人智又は物事がひらけすすむこと。世が開けて文化がすすむ。開明。文明。
〔松平春嶽、偶成詩〕眼見年年開化新。
②化を開く。風化教導して世運の進歩を計る。
〔顧愷之、定命論〕夫建極開化、樹聲胎則。
〔李邕、淄州刺史謝上表〕子人開化、議事立權。（※以上２例とも返り点を省略。）
③縣名。（※以下省略。）
④府名。（※以下省略。）
⑤第九代の帝諡。

『大漢和』の①の意味は、『日国②』『明治』『漢語』でも記述されている「社会がひらける」ことを表す意味であるが、その用例は幕末から明治期の大名、松平春嶽（1828 - 1890）によるものであるので、この「社会がひらける」ことを表す意味は中国にあったものではなく、日本で生まれたものである可能性が高い。そして、『大漢和』の②の意味は『漢語』で「社会がひらける」の意味を表す「開化」の由来として挙げられていたものであり、示されている用例もほぼ同じものである。

以上の各辞典の記述を総合すると、「開化」は仏教語の「開化（カイケ）」の「教え導く」の意味、もしくは、漢語の「開化」の「風化教導して世運の進歩を計る。」の意味

から、「社会がひらける」という意味に用いられるようになり、そこからさらに「西洋風を気どる」という人を形容する表現に拡大していったとまとめることができる。「開化」については、近代の日本語における意味の拡大に関しては各辞典間の記述に齟齬は見られず問題はないが、その由来については二つの説があるため、これについて今後検討する必要があるだろう。

3－2.「半開」

次に、「半開」について、辞典における記述を確認する。「半開」は『日本国語大辞典②』、『明治のことば辞典』、『大漢和辞典』に立項されているが、『小学館古語大辞典』、『角川古語大辞典』、『古典基礎語辞典』、『現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典』には立項されていない。そして、「半開」に関しては「はんびらき」「はんびらけ」という語も存在し、「はんびらき」は『日国②』と『角川古語大辞典』に、「はんびらけ」は『日国②』と『明治』に立項されている。まず、「半開」の『日国②』の記述は以下の通りである。

『日国②』

①戸などがなかばひらくこと。また、花などがなかば咲くこと。はんびらき。

＊日葡辞書（1603‐04）「Fancai（ハンカイ）ハンカウ。ハンブン　ヒラキ、ハンブンワフサガッテ　アル　コト」

＊養生訓（1713）三「古人の曰、酒は微酔にのみ、花は半開に見る。此言むべなるかな」

＊滑稽本・東海道中膝栗毛（1802‐09）八・序「花の半開酒の微酔に託たれど」

＊ヤゴの分際（1962）〈藤枝静男〉「血の気の失せた乾いた唇を半開にした半死体が彼の妻である」

＊白居易‐中書寓直詩「繚繞宮牆囲禁林、半開閶闔暁沉沉」（※この例は返り点を省略。）

②文明などが少し開けていること。未開の域を脱しながらも、まだ開化の域には達していないこと。はんびらけ。

＊西洋道中膝栗毛（1874‐76）〈総生寛〉一二・上「今の支那比耳西亜、土耳其等の様になりたのを半開の民といい」

＊造化妙々奇談（1879‐80）〈宮崎柳条〉一「各国自から等差（たがひ）有りて、許多（あまた）の種類を別ち、全開化あり半開あり」

＊小説神髄（1885‐86）〈坪内逍遙〉上・小説変遷「嗜好十分に高尚ならざる文運半開の比にありては」

『日国②』の①の意味は「物理的になかばひらく」「花がなかば咲く」というものである。これは中国の漢詩の用例があり、日本語の用例は中世・近世期のものと第二次大戦後のものであるため、少なくとも①の意味の「半開」は中世から現代にかけて使われてきたものだろうと考えられる。『日国②』の②の意味は「開化」「未開」と関係する「社会がひらける」の意味であり、これは近代の用例のみが挙げられている。これらのことから、「半開」は「物理的なものの状態」を表す語であったのが、近代になって「社会がひらける」という社会全体の文化的な変化を表す意味を持つようになったことが推測できる。また、①には同義語として「はんびらき」、②には「はんびらけ」が挙げられていて、意味によって「はんびらき」「はんびらけ」の語に分かれることがわかる。

上記の通り『日国②』には「半開」の語誌についての記述はないが、『明治』には「半開」の由来が記述されており、それは以下のものである。

『明治』

（前略）▽意味　英語 Semi-civilization　の訳語「半開化」の略語から、「文明が未開から開化への中間の状態にあること」の意味が生じた。明治時代の流行語。総生寛の『西洋道中膝栗毛』一二編・上（明治6）には「今の支那比耳西亜（べるしや）。土耳其等（とることう）の様になりたのを半開の民といひ」とある。

『明治』には、「半開」の「社会がひらける」の意味は「Semi-civilization　の訳語『半開化』の略語から」きたものであるとされている。つまり、元々あった「半開」という語に翻訳語としての意味が付与されて、明治時代に流行語として使われたということになる。そしてまた、「半開化」の略語ということになると、「社会がひらける」意味を表す「開化」が成立してから、「半開化」という語が成立し、そこから「半開」に「社会がひらける」の意味が加わったという流れになると考えられる。このことをふまえた上で、「半開」についての『大漢和』の記述を確認したい。

『大漢和』

①半ば開く。

〔白居易、中書寓直詩〕繚繞宮牆圍禁林、半開閶闔曉沉沉。

〔歐陽瑾、折楊柳詩〕垂柳拂妝臺、葳蕤葉半開。

〔錢蘀石、出東林六七里望廬山詩〕連峯出雲雲半開、奔渠捲雪響春雷。（※以上３例とも返り点を省略。）

②半ばはれる。半晴。

〔蘇軾、虔州八境圖詩〕烟雲縹緲鬱孤臺、積翠浮空雨半開。

〔楊萬里、郡圃殘雪詩〕城外城中雪半開、遠峯依舊玉崔嵬。（※以上２例とも返り点

を省略。）
③半ば咲く。半咲き。
〔李中、桃花詩〕幾樹半開金谷曉、一溪齊綻武陵深。
〔楊萬里、懐古堂前小梅漸開詩〕未吐誰知膚底雪、半開猶護蕊頭金。
〔葉顒、九日詩〕嫩菊半開香未老、奇峯相對眼終青。（※以上３例とも返り点を省略。）

『大漢和』の意味のうち②は『日国②』にはないものである。『日国②』の①の意味にあたるものは『大漢和』の①と③の意味になるが、『日国②』の②の意味、「社会がひらける」の意味にあたるものは『大漢和』には記載されていない。つまり、「開化」では（後述するが「未開」にも）「社会がひらける」の意味にあたるものが、日本での用例ではあっても『大漢和』に記載されているのに対し「半開」はそうなってはいないということである。このことから、「開化」「未開」と「半開」とでは使われ方などに何らかの違いが見られる可能性があると考えられる。

また、「半開」に関する「はんびらき」「はんびらけ」という語の意味は以下のように記述されている。

「はんびらき」
『日国②』
なかばひらくこと。また、なかば開いていること。はんかい。
＊多情多恨（1896）〈尾崎紅葉〉前・二「山茶花の半開（ハンビラキ）が一輪」
＊苦の世界（1918 - 21）〈宇野浩二〉四・二「口を半びらきにして」
＊禽獣（1933）〈川端康成〉「半開きの翼を」
＊他人の顔（1964）〈安部公房〉灰色のノート「警戒気味に、半開きにされたドアの間に」

『角川古語大辞典』
戸口などが半分ほど開くこと。開花の完全でない状態をもいう。
「譬はゞ花の半開（はんびらき）、柳の髪に焚きしめし、伽羅の仄に打薫り」〔侈紫田舎源氏三〇・下〕
「梅本の傘吹降りに半ひらき」〔柳多留・別編・中〕

「はんびらけ」
『日国②』
文明などが少し開けていること。はんかい。

『明治』

（前略）▽意味　半ば開けている状態をいう。開化（かいか）—半開（はんかい）—未開（みかい）に対して、ひらける—ひらけないの中間として考えられた語。

語形　ハンビラケとハンピラケとがある。

やはり、「はんびらき」は、「半開」の『日国②』の①の意味、「はんびらけ」は『日国②』の②の意味を表している。そして、『角川古語大辞典』の用例から「はんびらき」は近世から見られる語であることがわかる。一方の「はんびらけ」は『明治』では「開化—半開—未開」のセットに対して「ひらける—はんびらけ—ひらけない」という形式を整えるために作られた語とされている。そうなると、「はんびらけ」は「半開」という語が「社会がひらける」の意味を持つようになった後に成立したのではないかと考えられるが、それについてはまだ実際の用例をもって確認することはできていない。そしてまた、上のような『明治』の記述は、「開化—半開—未開」というものをセットとして認識する視点からなされていて、少なくとも現代においてはこの３語をセットとして考える視点が珍しいものではないことが示されている。

これまで見てきた「半開」の意味及び使われ方をまとめると以下の３点になる。

①『日国②』の①の意味「物理的になかばひらく」「花がなかば咲く」は、中国の漢詩の用例があり、日本語の用例も中世・近世期のものと第二次大戦後のものであるため、この意味の「半開」は中世から現代にかけて使われてきたものだということ。

②『日国②』の②の意味「社会がひらける」の意味については、『日国②』で挙がっている用例も近代のもののみであり、『明治』には「半開」のこの意味は「Semi-civilization　の訳語『半開化』の略語から」きたものであるとされている。つまり、元々あった「半開」という語に翻訳語としての意味が付与されて明治時代に流行語として使われたが、この意味の「半開」は一時的に使用されただけで現在は使われなくなっているということ。そしてまた、「社会がひらける」意味を表す「開化」が成立してから、「半開化」という語が成立し、そこから「半開」に「社会がひらける」の意味が加わったという流れになると予想されるということ。

③「開化」や「未開」では、「社会がひらける」の意味にあたるものが『大漢和』に記載されているのに対し、「半開」はそうではないため、「開化」「未開」と「半開」とでは使われ方などに何らかの違いが見られる可能性があるということ。

３－３.「未開」

最後に、「開化」「半開」「未開」の３語のうち現在でも比較的見られる「未開」について、各辞典に記述されている意味を確認する。「未開」は『日本国語大辞典②』、『大

漢和辞典』には立項されているが、『小学館古語大辞典』、『角川古語大辞典』、『古典基礎語辞典』、『明治のことば辞典』、『現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典』には立項がない。まず、『日国②』の記述を見ると以下の通りである。

『日国②』
①花のまだひらかないこと。また、女のまだ男と通じないこと。
＊名語記（1275）五「未開の女の気分にちかづく」
＊運歩色葉（1548）「未開ミカイ　花」
＊郭震‐惜花詩「春風満目還惆悵、半欲離披半未開」（※この例は返り点を省略。）
②土地またはその分野がまだ開拓されていないこと。未開拓。
＊西国立志編（1870‐71）〈中村正直訳〉五・三「前人未開の秘奥を発せり」
＊一年有半（1901）〈中江兆民〉二「是れ我邦の如き商業的未開の際に在りて」
③まだ開化されていないこと。文明がゆきわたらないこと。野蛮。
＊蛻巌先生答問書（1751‐64か）中「子供の時は智恵未開なり、左といへば左、右といへば右、人の指南に任せ」
＊東京新繁昌記（1874‐76）〈服部誠一〉二・京橋煉化石「隆世に在ては則ち未開と称し」
＊開化本論（1879）〈吉岡徳明〉上・一「臣子婦を束縛抑制せんや、此則ち未開野蛮の風俗にして」

これらのうち、①の意味で使われる「未開」は現代語では見られないものだと思われる。②の意味は現代語では主に「未開拓」で表される意味であり、③の意味が本稿で取り上げる「社会がひらける」の意味を表すものであって、現代語で「未開」が使用される場合はこの③の意味であることが多いだろう。そして、②の用例の初出は1870年、③の用例の初出は1751‐64年となっていて、立項順と用例の初出が逆転しているのであるが、③の初出例『蛻巌先生答問書』の用例は「子どもの知能の発達」に関して「未開」と表現しているもので、『東京新繁昌記』（1874‐76）や『開化本論』（1879）に見られる「社会全体」に対しての意味とは少し離れているものである。したがって、この『蛻巌先生答問書』の用例によって、「社会がひらける」の意味の「未開」の初出例とみなすことはできない。

また、『蛻巌先生答問書』の用例は「子どものときは智恵がまだ発達していない」ということを表現していると考えられるため、「ある分野の発達がまだ進んでいない」という『日国②』の②の意味とも近いと考えることもできる。

このように見てくると、「未開」の意味は、元々は『日国②』①の「花のまだひらかないこと。」及びそこから転じた「女のまだ男と通じないこと。」の意味であったのが、

何かの発達の程度を形容するものとなり、それが土地もしくは商業など特定の分野に適用されたのが『日国②』の②の意味、社会全体について使われたのが『日国②』の③の意味と考えられる。

なお、『日国②』③に挙げられている、「野蛮」は『明治』において、「明治初年から『開化』と対になって『未開』の意味で多用された。」とされている語であり、本稿で検討する内容と密接な関わりを持っているものであるが、今回は紙幅の都合により「野蛮」についてはふれることができない。

次に、「未開」の中国での意味を『大漢和』で確認する。

『大漢和』
①まだ咲かない。まだ開花しない。
〔元好問、同兒輩賦、未開海棠詩〕枝間新綠一重重、小蕾深藏數點紅。
〔楊中陳、春寒詩〕春寒畢竟無多日、桃李何須怨未開。（※この例は返り点を省略。）
②まだ開通しない。
〔福惠全書、蒞任部、詳文贅説〕當東路未開、用馬稀少。（※この例は返り点を省略。）
③人智又は土地がまだひらけないこと。
〔大日本史、禮樂志〕風俗樸茂、人文未開。（※この例は返り点を省略。）

『大漢和』の①の意味は『日国②』の①の意味にあたるが、『日国②』①にある「女のまだ男と通じないこと。」は記述されていない。『大漢和』の②の「まだ開通しない。」の意味は現代語でいうと「未開通」にあたる語であるが、この意味は『日国②』には見られない。しいていうならば『日国②』の②「土地またはその分野がまだ開拓されていないこと。」と関係しているといえる。ただ、ここで挙がっている用例は『福惠全書』（1694）のものであり、この中国での意味が日本語にどのような影響を与えたかは判然としないが、「花についての形容だった語」が「土地に対して使う語」になっていることは注目するべきである。そして『大漢和』の③の意味は、『日国②』の②及び③におおむね相当するものであるが、「開化」と同じくここで示されている用例は中国の文献のものではなく、『大日本史』の「禮樂志」のものである。そのため、「未開」の意味のうち「社会がひらける」を表すものは、中国からきたものではなく日本で生まれた意味である可能性がある。

ここで、これまで見てきた「未開」の意味及び使われ方をまとめると以下の２点になる。

①「未開」の元々の意味は「花がまだ咲かない。」というもので、日本においてはそこから転じた「女のまだ男と通じないこと。」の意味でも用いられたということ。
②「未開」がどのようにして「土地／特定の分野／社会の発達の程度」を表す意味を持

つようになったかについてはわからない部分が多く、中国の文献の例やその日本での受容などを検証して解明していくことが待たれるが、少なくとも、日本では『蛻巖先生答問書』（1751 - 64 か）で「未開」を「子どもの知能の発達」に関して用い、より抽象的なものを形容する方向を示し、明治時代にいたって、ほぼ同じ頃に「未開」を「土地もしくは商業など特定の分野の発達の程度を形容する語」及び「社会全体の発達の程度を形容する語」として用いるようになったということ。

4. 各辞典の記述からわかること及び問題点

この節では、3 節で見てきた「開化」「半開」「未開」の語義の変化を概観し、今後研究していくべき問題点を整理したい。

まず、各語の語義の変化をまとめる。

◆「開化」の意味拡大の流れ

仏教語の「開化（カイケ）」の「教え導く」の意味、もしくは漢語の「開化」の「風化教導して世運の進歩を計る。」の意味。

↓

「社会がひらける」の意味『西洋事情』（1866 - 70）

↓

「人を形容する意味」『西洋道中膝栗毛』（1874 - 76）

◆「半開」の意味拡大の流れ

「物理的になかばひらく」「花がなかば咲く」

↓

「Semi-civilization　の訳語『半開化』の略語」として「社会がひらける」の意味を表すようになる。

◆「未開」の意味拡大の流れ

「花がまだ咲かない。」→「女のまだ男と通じないこと。」

↓

（「まだ開通しない。」『福惠全書』（1694）※この意味は『日本国語大辞典②』には掲載されていない。）

↓　※「花についての形容だった語」が「土地に対して」も使われるようになる。

「子どもの知能の発達の程度を形容する語」『蛻巖先生答問書』（1751 - 64 か）

↓　※より抽象的なものを形容するようになる。

「土地、商業などの特定の分野の発達の程度を形容する語」『西国立志編』（1870 - 71）

「社会がひらける」の意味『東京新繁昌記』（1874 - 76）

「未開」と「半開」に共通しているのは、元々は「花の状態を形容する語」であったということである。しかし、その2語が「社会がひらける」の意味を獲得していった流れは異なり、「未開」はその過程はよくわからないが、近世に「子どもの知能の発達の程度を形容する語」として用いられ、抽象的なものを形容するようになり、近代にいたって「社会がひらける」の意味を持つようになった。それに対し、「半開」は「半開化」という語の略語として「社会がひらける」の意味が加わったのである。

「開化」については、その語の由来に二つの説があるが、そのどちらにしても「物理的なものの状態」を表す語ではなく、「精神面に働きかける」語であるため、「未開」や「半開」とはその点が大きく異なっている。

このように、「社会がひらける」の意味を持ち、関連する語として認識されている3語であるが、その意味の拡大の流れは一様ではない。そして、これまでに確認してきたことから考えられる今後の研究課題は、以下の4点である。

（1）「開化（かいか）」の語の由来について、仏教語のカイケ（ケは呉音）からとする説と、顧愷之『定命論』などの漢籍に見られる例から生まれたものとする説の二つが存在しているため、どちらが適当かについて再度調査、検討すること。

（2）「未開」が「子どもの知能の発達の程度を形容する」意味を表すようになったことに、『福恵全書』（1694）に見られる「まだ開通しない。」という中国での「未開」の語義の変化が影響を与えているのかどうかということ。

（3）「開化」「半開」「未開」はどれも明治期に新しく作られた語ではなく、元々存在していた漢語に新たに「社会がひらける」の意味が加えられたもの、つまり流用されたものだといえる。「半開」と「未開」に関しては、どちらも元は「花の状態を形容する語」であったため繋がりがあるが、「開化」はそうではない。はじめからセットで作られたわけではないこの3語が、社会の発展の程度を表す一連の語として扱われるようになったのはいつ頃からなのかということ。

また、これと関係して、2節で見た進藤咲子（1970.03）に引用されている『輿地誌略（山梨県重版）』では、社会の発展段階を「文明開化ノ民―半開ノ民―未開ノ民―蛮夷」の四つに分けているので、明治期における社会の発展段階の認識について、「開化」―「半開」―「未開」の3段階とそれ以外の語を含む4段階と、どちらが一般的なものであったのかを検証することも必要である。さらにまた、仮に4段階だとした場合、「未開」が表す内容が3段階の場合とどのように異なるのか、現代語の「未開」が表す内容と比較した場合はどうであるのかということも確認したい。

（4）辞典での立項状況を再度概観すると、「社会がひらける」の意味が『明治のことば辞典』『大漢和辞典』の両方にあるのは「開化」のみで、「半開」は『明治』には

あるが『大漢和』にはその意味の記載がなく、「未開」は『明治』には立項されていないが『大漢和』には「社会がひらける」の意味が記載されている。このことから、明治時代に限定して見たときには「社会がひらける」の意味を表す「半開」は「未開」よりも一般的な語であったが、漢語全体の流れで見たときには、この意味の「半開」は非常に限定的なものであった。一方の「社会がひらける」の意味の「未開」は明治時代には使われることの少ない語であったが、現在まで使われる意味であるため『大漢和』には記載されている、と考えることもできるが、はたしてそう解釈していいのかということ。そしてそれと同時に、「未開」は今まで調べてきた範囲では、「開化」や「半開」とは異なり明治時代の流行語として扱われてはいないが、それは「開化」や「半開」に比べて明らかに出現頻度が少ないためであるのかどうかということ。

このように「開化」「半開」「未開」について少なくない課題が明らかになった。そこで本稿では、今後の議論の土台として、まずはこの3語の明治・大正期の使用状況の通時的変化を概観することとする。

5. 明治・大正期の「開化」「半開」「未開」の使用状況の変化

3節で見た「開化」「半開」「未開」の用例のうち、「社会がひらける」の意味に関わる用例（具体的には、『日本国語大辞典②』「開化」①と②、「半開」②、「未開」③、の意味にあたる用例）をそれぞれ年代順に配列して一覧表（表1）とし、その使用状況を整理する。

また、より多くの用例を得るため、3節に挙げた辞典に加えて『学研国語大辞典』『大辞林（第三版）』『大辞泉（第二版）』『平凡社大辞典』からも用例を採集した。新たに加えた用例を下に記す。ただし、辞典における立項自体を用例としているものは除いた。

「開化」

『日国②』の①の意味

『造化妙々奇談』（1879‐80）〈宮崎柳条〉一

「各国自から等差（たがひ）有りて、許多（あまた）の種類を別ち、全開化あり半開あり」

※3－2「半開」で既出の用例であるが、「開化」の用例だとも判断できたためこちらにも掲載する。

『文学評論』（1909）〈夏目漱石〉「男女交際が開けてから人間が開化した」

『雁』〈森鴎外〉（1911‐13）「当時の流行語で言うと、開化と云うものが襲ってゞも来たのか、」

「半開」

『小説神髄』（1885 - 86）〈坪内逍遙〉「其の社会が尚半開の位置にありなば」

『浮城物語』（1890）〈矢野竜渓〉「是等諸邦の民は半開にして」

「未開」

『小説神髄』（1885 - 86）〈坪内逍遥〉「総じて文化の浅かりける未開蒙昧の世にありては、」

■「社会がひらける」の意味に関わる用例の一覧表

◎表 1　※成立年が数年にまたがるものは、その終わりの年を使用した。

年	開化	半開	未開
1764			○
1865	①		
1870	①		
1871	①		
1872	①		
1876	②	○	○
1879			○
1880		○	
1886		○	○
1889	②		
1890		○	
1906	②		
1909	①		
1913	①		

これを見ると、やはり、明治時代の流行語であった「開化」が明治の初めからよく使われていたといえるが、それに対して同じく明治時代の流行語であったはずの「半開」の例が少なく、初出年も明治時代の流行語とはされていない「未開」と同じであることが気になる。（※「未開」の初出は 1764 年と早いが、この用例は前述したように「子どもの知能の発達」に関して「未開」と表現しているもので、「社会全体」に対しての意味とは少し離れているものである。それを除くと「未開」の初出年は「半開」と同じである。）

そこで、「開化」「半開」「未開」の使用状況をさらに考察するため、『日本語歴史コーパス明治・大正編 I 雑誌』（短単位データバージョン 1.1，中納言バージョン 2.3）を使

用し、『明六雑誌』（1874～1875）、『国民之友』（1887～1888）、『太陽』（1895・1901・1909・1917・1925）を検索して用例を採集し（コア・非コアの両方）、「開化」は『日国②』の①の意味のもの、「半開」は②の意味のもの、「未開」は③の意味のものを数えた。その結果が以下の表２である。（※コーパスの検索条件などは本稿末尾【使用コーパス】に記載した。）

◎表２　※検索結果から漢文の用例は除いた。

年	開化　※１	半開	未開　※３
1874	72（74）	2	0
1875	67（72）	0	0
1887	28	1	6
1888	31（33）	2	3（4）
1895	78（80）	6	27（39）
1901	30	1	25（37）
1909	8	4	11（15）
1917	2	2	15（18）
1925	10	2　※２	7（14）
計	326（337）	20	94（133）

＊明治時代 1868 年 - 1912 年　大正時代 1912 年 - 1926 年

※１　検索結果から、「開化天皇」「建物名」「半開化」を除いた。また、（　）内は『日国②』②の意味のもの、もしくは①か②か判断に迷ったものを加えた数。

※２　コーパスによる「未開」の結果を確認中、前文脈中の「半開国」を「半開」の用例であると判断して追加したもの。

※３「未開墾」「未開発」などを除いた。（　）内は『日国②』②の意味のもの、もしくは②か③か判断に迷ったものを加えた数。なお『日国②』①の意味の用例はなかった。

コーパスから得た用例をいくつか参考のために挙げる。

「開化」『日国②』①の意味のもの

『明六雑誌』1（1874）「洋字を以て國語を書するの論」〈西周〉

サンプル ID：60M 明六 1874_01001　開始位置：1000　連番：680

「歐洲諸國ト比較スル冖ノ多カル中ニ終ニハ彼ノ文明ヲ羨ミ我カ不開化ヲ歎シ果テ々ハ人民ノ愚如何トモスルナシト云フ冖ニ歸シテ」

『太陽』1925-4（1925）「社會時評　痴子春秋」〈水島爾保布〉

サンプル ID：60M 太陽 1925_04044　開始位置：12960　連番：8550

「『開化の國には無き事に候に付以來停止たるべし』とやつた。つまりこの『開化の國には無き事也』の思想の逆が、ザン切り頭になり、」

「開化」『日国②』②の意味のもの

『明六雑誌』35（1875）「天降説（一）（明治八年四月一日演説）」〈阪谷素〉

サンプル ID：60M 明六 1875_35002　開始位置：10370　連番：6920

「我學問ヲ忘レ身モ家モ擲チ狹斜ニ入テ狎客幇間トナリ自ラ誇テ開化ノ通人ト稱スル類多シ」

「半開」『日国②』②の意味のもの

『明六雑誌』6（1874）「出板自由ならんことを望む論」〈津田真道〉

サンプル ID：60M 明六 1874_06001　開始位置：1910　連番：1320

「法例ヲ設ケテ之ヲ制スルハカノ半開ノ國專制ノ政治ニ多クコレアリ」

『国民之友』11（1887）「外交の二大傾向」〈伊集院兼良〉

サンプル ID：60M 国民 1887_11003　開始位置：4220　連番：2800

「今ノ白耳義ノ文明國ハ歐洲ノ弱國ニシテ俄國ノ半開國ハ歐洲ノ強國ナルハ盖シ其ノ實例ナリトス」

『太陽』1901-7（1901）「歴史以前の墨西哥國」〈室田義文〉

サンプル ID：60M 太陽 1901_07005　開始位置：26130　連番：16920

「否な寧ろ其開明の點より論ぜば、最早野蠻國の境遇を脱して、半開國の域に達したるなるべし、」

『太陽』1917-3（1917）「獨逸の潜航艇戰宣言と米國」〈松波仁一郎〉

サンプル ID：60M 太陽 1917_03015　開始位置：80770　連番：53330

「その陸軍の取るに足らぬ事は半開のメキシコをさへも旨くやれぬを見ても分る。」

『太陽』1925-4（1925）「赤化運動と平和運動」〈稲垣守克〉

サンプル ID：60M 太陽 1925_04025　開始位置：40720　連番：26840

「戰爭を出來得る限り防止せんとするものであつて、半開國又は未開地の住民が受けてゐる壓迫を排除せんとするところまでは」

「未開」『日国②』③の意味のもの

『国民之友』2（1887）「東京大學出版日本蝦夷關係一班略評」〈高橋五郎〉

サンプル ID：60M 国民 1887_02018　開始位置：49940　連番：35680

「其文字ノ上ニ顯ハレザル間ハ其變化殊ニ速カニ且多クシテ其事未開野蠻人ノ中ニ別テ熾ンナリトス、」

『太陽』1895-1（1895）「日本帝國の任務」〈中西牛郎〉

サンプル ID：60M 太陽 1895_01012　開始位置：6110　連番：4290

「其弱小なるものは之を扶け、其蒙昧なるものは之を導き、其未開なるものは之を誘進するの精神是れなり、」

『太陽』1909-1（1909）「文藝時評　超道徳的文學」〈長谷川天渓〉
サンプル ID：60M 太陽 1909_01039　開始位置：2050　連番：1350
「物質的文明の發展すら、決して誇るべきほどのものではない。未開野蠻と稱せらるゝ種族も、或は上代の人々も、」
『太陽』1917-4（1917）「心頭雜草」〈与謝野晶子〉
サンプル ID：60M 太陽 1917_04007　開始位置：32470　連番：21620
「若くは立派に他人から殺されようと云ふ様な豫想がありました。それは昔の未開時代の生活にあつて必要な理想であつたでせう。」

「未開」『日国②』②の意味のもの
『国民之友』26（1888）「丸山名政君に寄する書翰」〈朝比奈知泉〉
サンプル ID：60M 国民 1888_26013　開始位置：8470　連番：5800
「似而非史家の著述輙もすれば黄茅白葦の勢を恣にして我未開の田野に蔓らんことを懼るゝより出でたるにて」
『太陽』1895-1（1895）「農業教育に就きて」〈横井時敬〉
サンプル ID：60M 太陽 1895_01010　開始位置：14110　連番：9980
「北海道は未開の地なり、其状態稍や米國に類する所なきにあらざらん、」

さて、先の表 2 からわかることは、以下の 3 点である。
①「開化」は明治時代の初めからよく使われているが、明治時代の末になるとその数がかなり減少する。
②「半開」は明治時代から大正時代にかけて使われているが、全体に数は少なく、流行語らしい痕跡をとどめていない。
③「未開」は明治時代の初めの用例はなく、明治時代の後半になって数が増えている。

なお、それ以外にコーパスから得られた用例を確認した結果わかったことは、以下の 2 点である。
④「半開」の用例のうち、「物理的になかばひらく」の意味を表すものは 1925 年に 2 例が見られた（紙幅の都合により 1 例のみ挙げる）。
『太陽』1925-10（1925）「メキシコ旅行記」〈木村鋭市〉
サンプル ID：60M 太陽 1925_10062　開始位置：2950　連番：1890
「テワンテペツクの地峡を扇の要と見ればそれより北に向つて米國に接して半開の扇のやうに擴つて居る三角形の半島形」
⑤『明治のことば辞典』で「半開」の「社会がひらける」の意味のもとになったとされている「半開化」の用例は「開化」でコーパスを検索した中に 1874 年に 2 例、1875

年に1例、1909年に1例が見られた。その用例を参考までに以下に挙げておく（紙幅の都合により1例のみ）。

『太陽』1909-16（1909）「東西文明の融合」〈浮田和民〉

サンプルID：60M太陽1909_16001　開始位置：14690　連番：9630

「小學中學の時期を以て最も迅速なりとし、國民に在ては半開化の時期を以て最も著明なりとす。」

6.「社会がひらける」の意味に関わる用例の調査結果のまとめと今後の課題

これまでの調査結果より、大変大雑把ではあるが「開化」「半開」「未開」の明治・大正期における使用状況と、そこから考えられる今後の研究課題をまとめたい。

本稿で取り上げた3語のうち「開化」と「半開」は、これまでの辞典の記述で「明治時代の流行語」とされているものである。「開化」については、コーパスにおける用例数を見ても、明治時代の初めから多く使われ、明治時代末には数が減少していて、いかにも明治時代の流行語らしい様相を見せている。

しかし、一方の「半開」は明治時代の流行語とはされていない「未開」よりもコーパスでの用例が少なく、「開化」の用例が多い1874・1875・1887・1888・1895の各年においても「半開」の用例数はその十分の一にも満たない。このため、何をもって流行語とするかは難しいが、「半開」を「明治時代の流行語」として扱うには疑問が残る結果となった。また、「半開」の元々の意味「物理的になかばひらく」の意味は、『日本国語大辞典②』に1962年の用例が挙げられていて、現代にも残っていく意味である。この意味の「半開」の方が明治時代においても優勢であったのかと考えたが、これも今回の調査では1925年に2例見られただけであり、「物理的になかばひらく」の意味が優勢であったために、「社会がひらける」の意味の「半開」は使用頻度が少なかったということではないようである。そして、「半開」の「社会がひらける」の意味のもとになったとされている「半開化」の用例は、「開化」でコーパスを検索した中に1874年の2例、1875年の1例、1909年の1例が見られた。これだけの情報でもって「半開化」という語の使用状況を論じることは難しいが、「半開」に「社会がひらける」の意味が生じた後も、「半開化」という表現は消えたわけではないということはいえるだろう。

最後に「未開」であるが、この語は「明治時代の流行語」とされている「開化」「半開」とは違い、『明治のことば辞典』には立項されていない。しかし、コーパスでの検索では、「半開」よりも多くの用例が得られた。ただし、その用例の分布には偏りがあり、明治時代初めの『明六雑誌』（1874～1875）には用例が見られず、『太陽』（1895・1901・1909・1917）に多く見られる。このような用例の分布傾向から「未開」は明治時代の流行語とは扱われなかったのか、とも考えられる。

そして、「未開」の用例が明治時代の初めに見られないことに関しては、『明治』で「明

治初年から『開化』と対になって『未開』の意味で多用された。」とある「野蛮」の用例数の推移を今後調査する必要がある。この「野蛮」と「未開」との間に何らかの使用条件の差があったのかということなどについては稿を改めて考察したい。

【付記】

本稿は、学習院大学文学部教授の安部清哉先生の研究テーマに従い、その御指導を受けてまとめたものである。この研究テーマは安部先生の 2017 年度の授業（日本語学演習）でのテーマ（「連語・語構成・コロケーション」）に関わるものである。

【使用コーパス】

国立国語研究所コーパス開発センター編（2017）『日本語歴史コーパス』（バージョン 2017.9，中納言バージョン 2.3）https://chunagon.ninjal.ac.jp/（2017 年 10 月 14 日／12 月 25 日確認）

そのうちの

国立国語研究所コーパス開発センター（近藤明日子・間淵洋子・服部紀子ほか）編（2017）『日本語歴史コーパス明治・大正編 I 雑誌』（短単位データバージョン 1.1，中納言バージョン 2.3）http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/meiji_taisho.html（2017 年 10 月 14 日／12 月 25 日確認）

を使用し、① 2017 年 10 月 14 日、短単位検索で書字出現形「開化」「半開」「未開」を検索した。また、② 2017 年 12 月 25 日、文字列検索で「開化」「半開」「未開」を検索し、①で拾われていない用例を採集した。

【参考文献（論文）】

進藤咲子（1970.03）「開化期の言語の様相」『東京女子大学附属比較文化研究所紀要』28，pp.79-113，東京女子大学附属比較文化研究所

【参考文献（辞典）】

平凡社（1994）『大辞典』平凡社（創業 80 周年記念復刊　1936 年刊の複製）
中村幸彦ほか（編）（1982 - 1999）『角川古語大辞典』角川書店
中田祝夫ほか（編）（1983）『古語大辞典』小学館
惣郷正明・飛田良文（編）（1986）『明治のことば辞典』東京堂出版
金田一春彦・池田弥三郎（編）（1988）『学研国語大辞典　第 2 版』学習研究社
諸橋轍次（著）　鎌田正・米山寅太郎（修訂）（1990）『大漢和辞典　修訂第 2 版』大修館書店
日本国語大辞典第二版編集委員会（編）（2000 - 2002）『日本国語大辞典　第 2 版』小

学館
松村明（編）（2006）『大辞林　第３版』三省堂
佐藤亨（2007）『現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典』明治書院
李漢燮（編）（2010）『近代漢語研究文献目録』東京堂出版
大野晋（編）（2011）『古典基礎語辞典』角川学芸出版
小学館大辞泉編集部（編）（2012）『大辞泉　第２版』小学館

（いとう・まりこ　国語研究所技術補佐員、博士前期課程修了）